View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

定点観測法から得た着衣特性に関する一考察 : 東京と大阪の女子大生を比較して

著者	水谷 千代美, 清水 ひとみ
著者所属(日)	平安女学院大学生活環境学部生活環境学科 大妻女子大学家政学部
雑誌名	平安女学院大学研究年報
巻	4
ページ	63-70
発行年	2004-03-10
URL	http://id.nii.ac.jp/1475/00001209/

定点観測法から得た着衣特性に関する一考察

― 東京と大阪の女子大生を比較して ―

水谷千代美　・　清水ひとみ
（平安女学院大学生活環境学部）　（大妻女子大学家政学部）

1.　緒　　言

我々のまわりは、常に“モノ”があふれており、生活していく上では充分でありながらも、欲望に任せて次々に“モノ”を購入している。我々の消費形態は、嗜好という感性で成り立っていて、この消費行動が日本経済を左右するといっても過言ではない。生活者の嗜好を捕らえた、いわゆる感性商品は、不況の中でも順調な売上を示している。このように、従来の大量消費時代は去り、多品種少量生産で「マーケットイン」といわれる生活者中心の時代となっている。いまや、人々の多様化した感性を理解し、生産・消費体系を見直す必要に迫られている。生活者の感性を分析して的確な商品の設計・企画に役立つ感性情報を得ることを最終目的としたフィールド調査を企画した。

我々は、生活者の感性が、消費行動や服装などの中に潜んでいると予測し、いちばん身近で流行に敏感な女性用被服に着目した。これまでの女性用被服の関する調査は、ファッショントレンドの予測[1)]や嗜好色と着装色との関係[2)]などが行われている。色彩は文化、宗教、心理面などで深い意味を持つことが知られていることから、本研究では、女子大生の被服の形態と色彩の特徴を地域差（特に大阪と東京）も含めて把握することを目的とした。

2.　方　　法

2.1.　調査方法

女子大生のファッションと色彩をビデオ撮影による定点観測法を用いて調べた。調査の対象は、平安女学院大学（大阪府高槻市）と大妻女子大学（東京都千代田区）に在学する18歳から22歳の女子学生である。

2.2.　ビデオ撮影条件

デジタルビデオカメラ（シャープ製 Vl-MR１）と撮影フィルム（Panasonic デジタルビデオカセット DVM80）を用いて、それぞれの大学で一番往来の多い場所を選び、決まった曜日の昼休み、12時10分～12時40分の30分間、撮影を行った。撮影期間は2002年６月～７月である。

2.3.　集計方法

撮影したビデオテープの映像から着装者の衣服の種類と色彩を目測法によりカテゴリー別に分類した。衣服は、上衣と下衣を種類別に分類した後、さらにそれらの形態を細分化した。

色彩の識別は調査用カラーカード（㈶日本色彩研究所（色彩分類表（カラーコードダイアグラム）（小分類230色））を用い、それぞれの衣服の類似色を選定した。

3.　結果および考察

3.1.　衣服の種類・形態の共通性と相違性

衣服の種類、形態などを比較するには、撮影時の気候条件が同じでなければならない。特に、色彩

表１　平安女学院大学における着装者の上衣と下衣の種類・形態別組み合わせ数

	合計	ジーンズ				パンツ				スカート											
										ミニ				膝丈				ロング			
		スリム	ストレート	ベルボトム	その他(スリム・八分丈)	スリム	ストレート	ベルボトム	その他(スリム・八分丈)	タイト	プリーツ	フレア	その他	タイト	プリーツ	フレア	その他	タイト	プリーツ	フレア	その他
Ｔシャツ	84	13	36	1		5	15	1		3				6		4					
ブラウス	15	2	5				4	1						1		2					
ブラウス＋Ｔシャツ	1	1																			
パーカー＋Ｔシャツ	1		1																		
Ｇジャン＋Ｔシャツ	3					1	2														
カーディガン＋Ｔシャツ	22	1	10				7							1		2	1				
カーディガン＋ワンピース	2									2											
Ｔシャツ＋ベスト	1						1														
ワンピース	1													1							
合　　計		17	52	1	0	6	29	2	0	5	0	0	0	9	0	8	1	0	0	0	0
		70				37				23											

着装者数＝130人

表２　大妻女子大学における着装者の上衣と下衣の種類・形態別組み合わせ数

	合計	ジーンズ				パンツ				スカート											
										ミニ				膝丈				ロング			
		スリム	ストレート	ベルボトム	その他(スリム・八分丈)	スリム	ストレート	ベルボトム	その他(スリム・八分丈)	タイト	プリーツ	フレア	その他	タイト	プリーツ	フレア	その他	タイト	プリーツ	フレア	その他
Ｔシャツ	26	8	9				4							3	1	1					
Ｔシャツ＆Ｔシャツ	4	1	1			1	1														
ブラウス	11		4			1	5			1											
ブラウス＋Ｔシャツ	19	4	6			3	3							1		2					
セーター	3	1								1						1					
ツインニット	1													1							
パーカー	7	1	3			3															
パーカー＋Ｔシャツ	10		3			2	2							2		1					
Ｇジャン＋Ｔシャツ	1													1							
ジャケット＋Ｔシャツ	21	3	5	1		4	4							1		3					
カーディガン＋Ｔシャツ	34	7	8	2		1	6	1		1				1	1	5				1	
カーディガン＋ワンピース	3													3							
スーツ＋ブラウス	1													1							
重ね着*	10	2	5			1	1			1		4		1		1					
合　　計		27	44	3	0	16	26	1	0	4	0	4	0	15	2	14	0	0	0	1	0
		74				43				40											

＊重ね着は、着用者数を人数とする。
着装者数＝160人

は照明光によって見え方が異なるために、天候条件も重要である。この調査では、平安女学院大学は６月19日（最高温度30℃、最低温度18℃、湿度45%RH、天候晴れのち曇り）、大妻女子大学は６月28日（最高温度28℃、最低温度16℃、湿度53%RH、天候晴れのち曇り）に撮影したものがほぼ同じ条件を満たしているとして比較資料とした。着装者数は同日、平安女学院大学で130名、大妻女子大学で160名であった。

まず、平安女学院大学と大妻女子大学の学生の衣服スタイルについて調査した。表１と表２は、両大学学生の上衣と下衣の種類、形態別の組み合わせを着用比率で表したものである。下衣においては、平安女学院大生はジーンズの着用比率53.8%、パンツ28.5%、スカート17.7%、大妻女子大生はジーンズ44.6%、パンツ25.9%、スカート29.5%となった。両大学生ともジーンズ、パンツの着用が圧倒的に多く、動きやすさが重視されているようにみえる。ジーンズとパンツを形態別でみるとストレートが60～75%と多い。また、スカートでは膝丈のタイトスカートが約40%で、大学間の差は認められなかった。

上衣においては、Ｔシャツ、またはカーディガンとＴシャツとの組み合わせが、それぞれの大学での順位は逆転しているが、１位と２位を占めている。このように上衣については両大学ともに、着用されている衣服の傾向は同じであった。これは、ファッション情報の流通は大阪と東京で差がないことを示すものと考えられる。

次に、上衣と下衣の組み合わせを種類別に出現比率を用いて比較した。平安女学院大学の結果を図１、大妻女子大学の結果を図２に示した。平安女学院大生は、上衣Ｔシャツと下衣ジーンズという組み合わせが約40%を占めて圧倒的に多く、続いてＴシャツとパンツ、Ｔシャツとスカートの組み合わせとなった。着用している上衣の種類は全部で９種類であった。一方、大妻女子大生は、上衣カーディガン・Ｔシャツと下衣ジーンズ、上衣カーディガン・Ｔシャツと下衣スカートという組み合わせが多いが、出現比率はいずれも10%程度であった。大妻女子大生に見られた上衣の種類は全部で14種類であり、平安女学院大生の場合の1.5倍になる。このように着衣の種類でみると大妻女子大生は多品種少量の着用体系であるのに対して、平安女学院大生は少品種多量の着用体系で、学生の衣服着用がパターン化する傾向にあることが分かった。

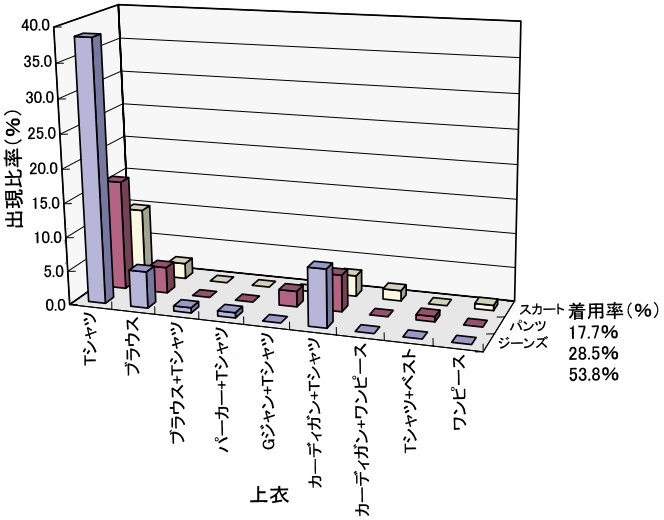

図１　平安女学院大学における種類別上衣と下衣の組み合わせ出現比率

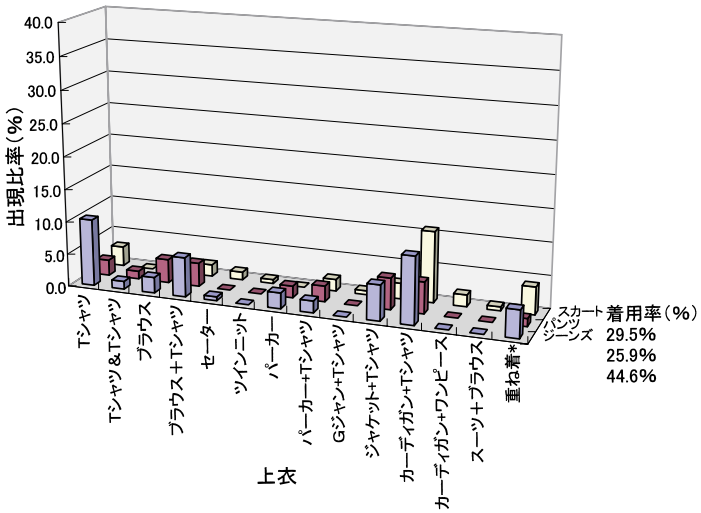

図２　大妻女子大学における種類別上衣と下衣の組み合わせ出現比率

3.2.　色彩の共通性と相違性

色彩は、ビデオ上の着装者の衣服を㈶日本色彩研究所調査用カラーカードで類似の色を選定した後、

JIS で規定されたマンセル値に置き換えて表した。周知のように色は、白、黒、灰色を示す無彩色とそれ以外の色を示す有彩色との二種類に大別される。両大学学生の衣服の有彩色と無彩色の比較した。平安女学院大生では338着の中で、有彩色の出現比率は45.4%、無彩色は54.6%であった。一方、大妻女子大生は421着の中で有彩色は47.2%、無彩色は52.8%となる。無彩色のうち、平安女学院大生は、白30%、黒55%、灰色15%に対し、大妻女子大生は、白35%、黒35%、灰色30%となっている。両大学とも無彩色の比率は、50%を超えているが、大学間に大きな差は見られなかった。このように無彩色が多いのは、衣服を組み合わせるとき配色しやすいということの他に、日本人の好きな色の上位を占めている[3)]ことと関係しているように考えられる。

有彩色は、色相、彩度、明度で表現でき、彩度と明度は、トーンで表すことがよく知られている。まず、着用された衣服の色相について両大学を比較し、その結果を図３に示した。この図から明らかなように、B（青）、PB（青紫）が一番多く、次いで R（赤）YR（黄赤）の色相が多く出現していることがわかった。B、PB の出現比率が高いのは、衣服の種類別着用数を示した表１と表２にみるように、いずれの大学もジーンズ着用比率が約45～55%と高いことから、主としてシーンズの色に対応している。

表３　平安女学院大学における衣服の色相とトーン別組み合わせの比現比率

	P	RP	R	YR	Y	GY	G	BG	B	PB	計
White											0.0
Pale			7.8	3.1	0.8			0.8	11.7		24.2
lt. Grayish			5.5	3.9	1.6	1.6					12.5
Light		1.6	1.6			0.8	3.1		14.1	1.6	22.7
Bright	1.6		2.3			3.1	2.3			0.8	10.2
Vivid											0.0
Strong			4.7							0.8	5.5
Deep									0.8	0.8	1.6
Dull			1.6	1.6					3.1	7.8	14.1
Dark				1.6							1.6
Grayish			0.8		0.8					1.6	3.1
dk. Grayish							0.8			2.3	3.1
Blackish			0.8							0.8	1.6
計	1.6	1.6	25.0	10.2	3.1	5.5	6.3	0.8	29.7	16.4	100.0

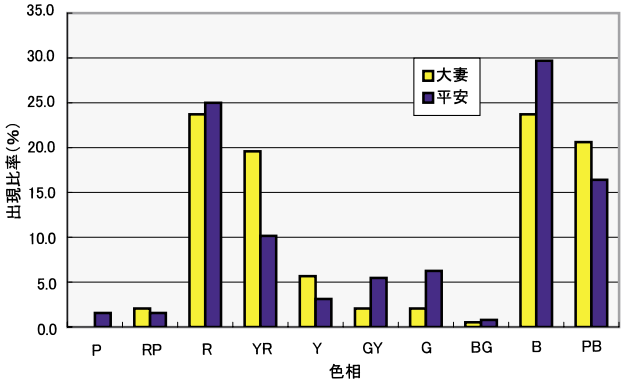

図３　衣服の色相別出現比率

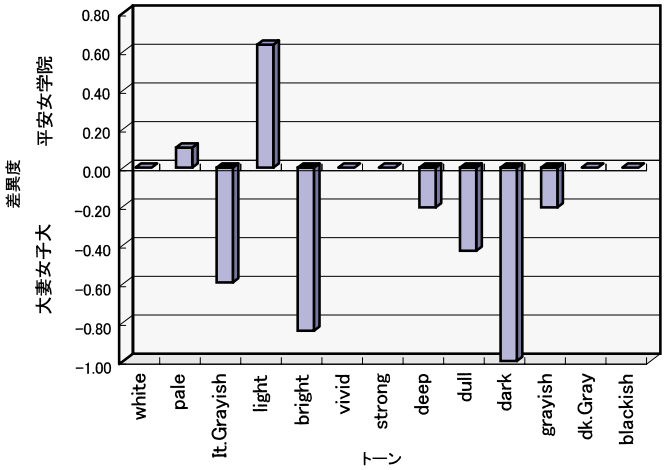

図４　着用されたジーンズのトーン分布の比較

表４　大妻女子大学における衣服の色相とトーン別組み合わせの比現比率

	P	RP	R	YR	Y	GY	G	BG	B	PB	計
White											0.0
Pale		1.0	8.2	10.8	0.5	1.5	0.5	0.5	9.3		32.5
lt. Grayish			5.7	5.2							10.8
Light		0.5	1.0	1.0	3.6		0.5		10.3	1.0	18.0
Bright			1.0	1.0			0.5			3.1	5.7
Vivid											0.0
Strong			5.2							0.5	5.7
Deep			1.0						1.0	1.0	3.1
Dull		0.5	0.5	1.0	0.5		0.5		1.5	9.3	13.9
Dark									1.5	1.0	2.6
Grayish				0.5	0.5	0.5				4.6	6.2
dk. Grayish			1.0		0.5						1.5
Blackish											0.0
計	0.0	2.1	23.7	19.6	5.7	2.1	2.1	0.5	23.7	20.6	100.0

それぞれの大学で着用されている衣服の色相のトーン分布を表３と表４に示した。表の行方向は色相（10種類）、列方向はトーン（13段階）を表している。表中の数字は、それぞれの色相、トーンの出現比率を示す。表３と４の結果をもとに、平安女学院大生と大妻女子大生の着用している衣服の色相とトーンの特徴を比較するための尺度として次式で定義される差異度を用いた。

差異度＝$(C_{H,T}-C_{O,T})/\{(C_{H,T}+C_{O,T})/2\}$

ただし、$C_{H,T}$ は平安女学院大生のトーンＴの出現比率

$C_{O,T}$ は大妻女子大生のトーンＴの出現比率

出現比率が余りに小さいものを比較しても無意味である。したがって、差異度の算出に当たっては、$C_{H,T}$、$C_{O,T}$ の少なくとも１つが設定出現比率（4.0）以上であることを条件とした。

この結果、差異度が正となるトーンは平安女学院大学の特徴トーン、負に出るものを大妻女子大学の特徴トーンとみることができる。

着用率が非常に高いジーンズの色相に対して、そのトーンの差異度を図４に示す。この図から、平安女学院大生は高明度中彩度 light トーンのジーンズの差異度が圧倒的に大きい。これに対し、大妻女子大生は、bright トーンが多いものの低明度中彩度の dark、dull トーン、低彩度低明度の grayish トーン、低明度高彩度 deep トーンという中間色調から暗清色調にも差異がみられることがわかった。

次に、上衣について、同じ手法で調べた結果を図５にまとめた。上衣もジーンズと同様に平安女学

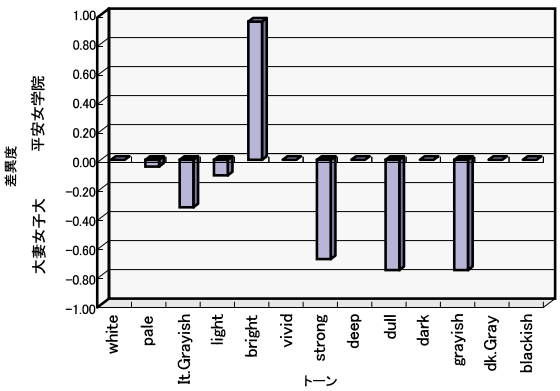

図５　着用された上衣のトーン分布の比較

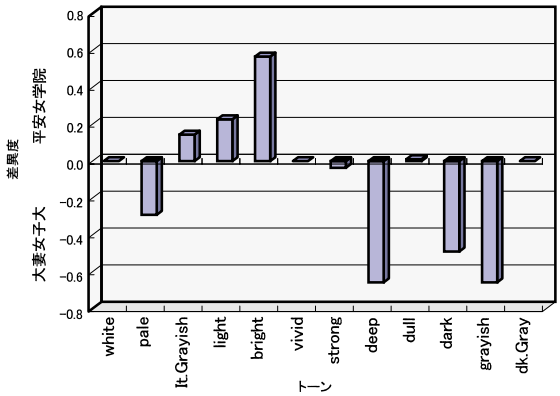

図６　上衣および下衣のトーン分布比較

グループ(1)

グループ(2)

グループ(3)

図７　平安女学院大学における学生の集団行動の様子

院大生は bright トーンが圧倒的に使われているのに対し、大妻女子大生は、dull、grayish トーンが多く着用されていた。上衣および下衣をまとめた結果では図６から明らかなように、平安女学院大生は、light, bright トーンのような明清色調が主として着用され、大妻女子大生では、deep, dark, grayish のような暗清色調が好んで着用されていることが明らかとなった。着用された衣服の色相には大きな違いがなかったが、トーンに明らかな特徴が認められた。この結果は、東京と大阪の文化の違いとも関連がありそうである。

3.3.　自己表現としての衣服

平安女学院大生の衣服は bright トーンの出現比率が高く、独占的に使われているのに対して、大妻女子大生では、暗清色調の数種類のトーンが使われている。この結果は、衣服の上衣・下衣の種類別組み合わせと同じ傾向を示している。つまり、平安女学院大学の学生はひとつの種類または形の衣服に集中してパターン化しているのに対して、大妻女子大学の学生は多様化している。ひとつのものへの集中は、換言すると模倣意識または同族意識の現れと考えられる。事実、図７のような写真をみると、仲良しクループは同じようなスタイルの衣服を着用しており、みんなと同じでありたいという同族意識が明確に現れていることがわかる。一方、大妻女子大生は、図８にみられるように友達同志でも同じようなスタイルの衣服を着用した人は少ない。衣服を着用する意義のひとつに、自分を表現する（自己主張）手段であることが指摘されている。このような観点からすると大妻女子大学の学生は、自己主張が強いと判断できる。山口らは自己主張の度合いは地域によって異なり、都会人の方が地方出身者に比べて低いと報告[4-5]している。これは、自己形成の段階で文化的、社会的因子など多くの要素が地域特性と関係して作用してきた結果と考えられる。

両大学学生の出身地を調べてみると、平安女学院大学の学生は全体の約92%が主に京都、大阪からの自宅通学生であるのに対し、大妻女子大学の学生は、東京以外の出身者が約40%を占め、いずれも

グループ(1)

グループ(2)

グループ(3)

図８　大妻女子大学における学生の集団行動の様子

寮またはひとり暮らしであった。このように、地方出身者の数と図7,8の観察結果から、自己出張する衣服の意味が理解できたように思われる。

4. 結　　語

大阪と東京の女子大学に在学する女子学生を対象として衣服の色彩と形態に関する調査を行った。その結果、衣服の種類・形態の特徴および色使いについていくつかの知見が得られた。地域差を詳しく議論するためには一層のデータ収集が必要である。しかし、本調査により「事物と人間の具体的な関係を成り立たせる身体性を備えた行為」である衣服、換言すれば衣服と人間との関係、衣服と人間が対話する関係[6]を部分的でも理解することができたように思われる。

この研究は、今後、感性を中心としたファッショントレンドや人間の被服行動を解明する有力な方法論に発展することが期待できる。衣服は人間が着用して初めて完成したものとなる。被服を通して人間そのものの理解につながるのではないかと考えている。

謝　　辞

本調査を行うにあたり、大妻女子大学教授梶原莞爾博士のご助言いただき、また、本学生活環境学部助手杉田明子さん、生活環境学部４年生武田侑子さんのご協力を得たことに深く感謝を申し上げます。

参考文献

1） 白山恵弥子，杉野女子大学紀要，22，1（1985）
2） 山口久子，加藤元子，中保淑子，椙山藤子，家政学雑誌，13，433（1962）
3） カラートレンドを探る、p.114、㈶日本色彩研究編（1990）
4） 山口惠子、藤井一枝、繊消誌、40，8（1999）
5） 山口惠子、藤井一枝、日本繊維製品消費科学会年次大会・研究発表要旨（2003）
6） 梶原莞爾、日本家政学会夏季セミナー予稿集（2003）

A Study of the Characteristics of Women's Wear with Fixed Point Observation

― Comparison of Women's Clothing in Tokyo and Osaka ―

Chiyomi MIZUTANI・Hitomi SHIMIZU

ABSTRACT

The fashion and color trends were analyzed to elucidate the commonality and diversity in two women's university students' clothing in Osaka and Tokyo, the two largest cities in the west and east of Japan, respectively. The clothing style, color and combination of women's wear were categorized from photographs taken under the constant conditions of time and place. It was found that the students in Tokyo prefer to dress in dark tones, while the students in Osaka wore clothing with light and bright tones.